

紙幣に描かれたユダヤ人 — ポグロムからホロコーストへ —

田 中 利 光

はじめに

昨今の世界情勢をみるときに、とりわけ欧州における反ユダヤ主義的動向の再燃が注目される。筆者の手元には最近の事例として次のようなものがある。

2018年9月にCNNが実施した欧州7カ国（オーストリア、フランス、ドイツ、英国、ハンガリー、ポーランド、スウェーデン）の各国成人1,000人余り、合計7,000人余りを対象にした調査で、ユダヤ人に対する古くからの固定観念が現在も各地に根強く残り、さまざまな形で新たに顕在化していることが明らかになった¹⁾。

2019年2月20日のAFP通信によると、フランス東部にあるユダヤ人墓地で、約80基の墓石にナチス・ドイツを象徴する「かぎ十字」がスプレーで書かれる被害が発生し、その中には1970年代のネオナチとの関わりがあるとされる分離派組織「アルザスの黒い狼」の表記も見つかっている²⁾。

2019年4月24日のAFP通信によると、ポーランド南東部の町で行われたイースター行事で、典型的なユダヤ人に似せた人形が街の広場に立てられた櫓に吊るされた。その後、降ろされた人形は子どもを含む地域住民によって棒で殴られたうえ切断され、火をつけられ川に放り込まれた³⁾。

2019年12月14日の朝日新聞デジタルによると、ユネスコの無形文化遺産に指定されていたベルギーの首都ブリュッセル近郊のカーニバルで、ユダヤ人を模した人形が金の袋の上に座りネズミに取り囲まれている様を表現した山車が街中を練り歩いたことで、無形文化遺産登録が取り消される事態となった⁴⁾。

これらの報道にみるように、今日においてもなお続いている反ユダヤの感情の根深さには驚愕するばかりである。欧州における反ユダヤ主義は昨今に始まったことではなく、Léon Poliakov（レオン・ポリャコフ）の名著からも知られるように、幾世紀もの歴史の中に存在してきたものである（Poliakov 1955-1977）。

本稿では、1920年代前半にハイパーインフレーション下にあったドイツやオーストリアで発行された緊急準用通貨（Notgeld⁵⁾）、以下「ノートゲ

ルト」と記す)に描かれたユダヤ人に着目し、ノートゲルトを通して拡散された反ユダヤ思想の実態を考察する。

ここでは、のちにユダヤ人を揶揄したノートゲルトに影響を与えることになる1800年代後半のロシアのポグロムから、ノートゲルトに描かれたユダヤ人の画像をのちにドイツ帝国銀行券(ライヒスバンクノート)に重ね刷りして配り、反ユダヤの情報統制(プロパガンダ)を謀った1940年代前半のナチスの実態までを扱うことにする。

1. ポグロム下のユダヤ人

(1) 近代における大規模なユダヤ人差別と迫害

ポグロムとはロシア語で「破壊」「破滅」を意味する。それは1881年4月にヘルソン県のエリサヴェトград市で起こったユダヤ人襲撃事件に端を発する(黒川 1996: 121)。この事件を含め、ロシア国内では過去に三つのポグロムの大きな波が確認されている。第一波は1881年から1884年にかけて起こり、第二波は1903年から1906年にかけて起こった。そして第三波は1917年から1921年にかけて起こった(中谷 1997)。

エリサヴェトградから始まった第一波はキエフやオデッサを席卷し、ベラルーシとリトアニアに達した。1882年5月には、反ユダヤ政策を掲げた「ユダヤ人に関する臨時条例」(所謂「五月法」)が制定され⁶⁾、ユダヤ人のロシア脱出の誘因ともなった。ベッサラビアのキシネウで始まった第二波は、ベラルーシのホーメリ等でも起こった。その最中、1903年に『シオン長老の議定書』という表題で知られる偽文書がロシアで印刷され出回った。第三波ではウクライナを中心として激しい殺戮が再燃した。

今回、筆者が注目しているのは、第二波の最中に現れた『シオン長老の議定書』である。この文書をテーマにしたノートゲルトが1921年にドイツのブレーメンで発行された。『シオン長老の議定書』は、のちにAdolf Hitler (アドルフ・ヒトラー)の*Mein Kampf* (『わが闘争』)でもユダヤ人排斥の論拠として言及されることになる(Hitler 1925-1927)。

(2) シオン長老の議定書

この文書の由来には不確かな部分があり、その成立過程は判然としていない。いずれにせよ、1905年にSergei Nilus (セルゲイ・ニルス)による文書の完全版がロシアのTsarskoe Selo (ツァールスコエ・セロー)で発行されると、ドイツ語(1919)、スウェーデン語(1919)、英語

(1920)、フランス語(1920)、ポーランド語(c. 1920)、イタリア語(1921)、ハンガリー語(1922)、ルーマニア語(1923)、ラトビア語(1923)等に翻訳され(Cohn 1967, 1969 2nd ed.)、ときの反ユダヤ思想に乗じる形でこの文書は格好の興味本位の読物として拡散していった。この文書についての学究的な研究成果としては、Norman Cohn(ノーマン・コーン)の著書が挙げられよう(Cohn 1967)。

この文書の日本語訳は、今日まで全訳、部分訳、抄訳で数種類のものがあるが、ここでは包荒子(1924、1925 4版)、愛宕北山(1938)、四王天延孝(1941)の翻訳本をもとに、文書の内容を梗概したいと思う。

この文書は24の議定(Protocols)から構成されている。ユダヤ人による世界制覇を目的として、新聞、自由主義、資本主義を操作し、非ユダヤ世界に経済的、政治的混乱を企てるというものである。例えば、ユダヤ人は自らの経済力を利用し、ゴイム(異邦人)国家の不安定な内政等を利用し、その国を自らの意のままにする(第1議定参照)。ユダヤ人の勝利は、盲目的な国(民)への偽善の政策を有利に展開することにより得られる(第1議定参照)。戦争が経済に基礎を置くようになれば、ユダヤ人の経済力と優れた能力が彼らを支配し、国の要職をユダヤ人の都合の良いように動かす(第2議定参照)。それらの目的のため、ユダヤ民族は各国に対し働きかけている。ユダヤ人は異邦人に学術的助言をしているが、その助言はユダヤ民族の目的のために操作した助言である(第3議定参照)。

そのように政治、経済、教育等をユダヤ人が操作し、いずれ世界を自分たちの意のままに操り支配するといった内容が、この文書の全24議定の随所に述べられている。

2. ノートゲルトにみる反ユダヤ意識

(1) ドイツの貨幣供給体制の変遷

ノートゲルトは、ときの貨幣供給体制の中で発行されたものであるため、当時の事情についてまずは若干の説明をしておくことが必要であろう。

ドイツでは、1874年から1948年までReichsbank(ドイツ帝国銀行、以下「ライヒスバンク」と記す)が存在したが、1914年の第一次世界大戦における貨幣制度の変更により金貨の流通が止まり、反面、ライヒスバンク銀行券(ライヒスバンクノート)の無制限増発がなされ、それによってインフレーションを引き起こす素因が形成された。その時期に発行された紙幣のマルクをPapiermark(パピエルマルク=「紙のマルク」の意)と呼

んでいる⁷⁾。またこの時期に、地方自治体や民間企業等によってNotgeld（ノートゲルト）と呼ばれる緊急準用通貨が、ドイツ及びオーストリアで発行された⁸⁾。ノートゲルトが使用されたのは比較的短期間で、1922年7月には「ノートゲルトの発行並びに兌換に関する法律」によって原則停止となった⁹⁾。ノートゲルト発行中にライヒスバンクは超高額紙幣のパピエルマルクを発行するも、その価値は急激に暴落し、1922年から1923年にかけてハイパーインフレーションが発生した。そこで、ハイパーインフレーションを抑えるための臨時通貨として1923年から（実際の発行は1924年）Rentenmark（レンテンマルク）が発行され通貨は安定するに至った。そして、ライヒスバンクは1924年から1948年まで再びライヒスマルクを発行した。

本稿では、地方自治体や民間企業等が発行した緊急準用通貨であるノートゲルトに描かれたユダヤ人を取り上げ、そこにみられるユダヤ人への憎悪の感情を検証する。また、のちにヒトラー政権が、それまでにノートゲルト等に描かれたユダヤ人を揶揄した画像を、民衆の情報統制を謀る目的で、ライヒスバンク紙幣に重ね刷りしたものからみることにする。

(2) ドイツにおける反ユダヤ意識の増幅

ドイツのインフレーションが第一次大戦後特別に激化して、大破綻にまで陥った原因について、当時ドイツでは、大戦で敗北を喫したドイツに課せられた賠償請求によって、ドイツ政府が大量の通貨マルクを増発したことが要因であると考えられていた。その後、賠償はインフレーションの事態を悪化させたものの真の原因ではなく、真の原因はインフレーションを加速せずに平和経済に移行する決定的前提としての強い政府がなかったこととされている（渡辺 1989:174）。

しかしながら、ほとんどのドイツ国民には自国の通貨の価値が下がったと認識されておらず、他国通貨の価値が不釣り合いに上がったせいで、あらゆる日常の品物の値段が押し上げられたのだと思われていた（Fergusson 1975, 2015:4）。そのような感覚の麻痺は、大戦中からすでに行われていた極端な通貨の供給過剰体制も影響していた。国民の意識は、物価高騰は外国為替相場が上昇したためであり、外国為替相場の上昇は株式の投機が原因であり、それらはすべてユダヤ人たちのせいであると、根拠のないユダヤ人責任論へと非難の矛先が向かっていった。

(3) ノートゲルトに描かれたユダヤ人

今回取り上げるノートゲルトは何れも反ユダヤの画像や文言が記されているものである。このような過激なもの実際に市中に出回っていたのかと目を疑いたくなるものもあるが、まぎれもなく歴史の一時代に現れたものである。ユダヤ人を揶揄したノートゲルトは今回取り上げるもの以外にもあるが、ここでは明らかにそれと判別できる画像や揶揄する文言等があるものを数種類取り上げる。

①「シオンの長老」(図1参照)

発行年：1921年。発行地：Bremen（ブレーメン）。額面：2マルク。

この種のノートゲルトは、50ペニッヒ、1マルク、2マルク、5マルクの四種の額面が発行されている。何れも額面の違いを除けば、表面、裏面ともに同じ内容の印刷である。

表面下部に、Die Weisen von Zion（シオンの長老）の文言がある。これは先にロシアで出された『シオン長老の議定書』に由来する。長老たちの鼻が「かぎ鼻」で描かれているが、それはユダヤ人を揶揄する典型的な表現法である。

裏面には、巨大な木馬が描かれており、それはギリシア神話の「トロイの木馬」に由来し、巧妙な罠を仕掛け密かに敵を衰退させることを意味している。木馬の足下には「ブレーメン市場での不名誉」と記されている。

これらの画像は「ユダヤ人は信用できない」というメッセージであることは明白である。

のちに、ヒトラーは*Mein Kampf*の中で、ユダヤ人を非難する論拠として『シオン長老の議定書』を引き合いに出しており（Hitler 1925-1927, 1936 Zwei Bände）、その一部を平野訳より拾ってみたい（平野 2018：400）。

この民族の全存在が、どれほど間断のない嘘に基づいているかということ、ユダヤ人から徹底的にいやがられている「シオン賢人の議定書」によって、非常によく示されるのだ。それは偽作であるに違いない、とくり返し「フランクフルター・ツァイトゥング」は世界に向かってうめいているが、これこそそれがほんのものであるということのもっともよい証明である。多くのユダヤ人が無意識的に行うかも知れぬことが、ここでは意識的に説明されている。そして、その点が問題であるのだ。この秘密の打ち明けが、どのユダヤ人の頭から出ている

かはまったくどうでもよいことである。だが、それがまさにぞっとするほどの確実さでもってユダヤ民族の本質と活動を打ち明けており、それらの内面的関連と最後の究極目標を明らかにしている、ということが決定的である。けれども、議定書に対する最上の批判は現実がやってくれる。この書の観点から最近の二百年間の歴史的発展を再吟味するものは、ユダヤ新聞のあの叫びもすぐに理解するだろう。なにしろ、この書が一度でもある民族に知れわたってしまう時は、ユダヤ人の危険はすでに摘み取られたと考えてもよいからである。

以上から、『シオン長老の議定書』はユダヤ人迫害の理由付けとして、文書の伝播のみならず、ノートゲルトとして大衆に行き渡るように画策され、流布していったことが確認される。

②「絞首刑のユダヤ人」（図2参照）

発行年：1921年。発行地：Tostedt（トシュテット）。額面：50ペニツヒ。

表面には、働いている男性や鉄道等、日常の風景が描かれている。

裏面には、絞首刑にされた二人の男性が描かれており、二人ともユダヤ人を揶揄する際に用いられる典型的な鼻の形で描かれている。その様子をカラスと思しき鳥が見ており、上部中央には頭蓋骨とクロスした骨が描かれ、画像が不気味に強調されている。

裏面の左端には「これは、すべての詐欺師が進むべき道である」と書かれ、右端には「そうすれば、物事はドイツでうまくいくだろう」と書かれている。「詐欺師」という表現はユダヤ人を揶揄する際によく用いられていた。

③「悪魔と密談するユダヤ人」（図3参照）

発行年：1921年。発行地：Thale（ターレ）。額面：50ペニツヒ。

表面には、右側にいる赤い目の男性（ユダヤ人）が、左側にいる悪魔と密談している画像がある。周囲には、白へび、カエル等があり、これらの生き物は民間伝承で伝統的に悪魔と関連していると考えられていた。中央には「二度と戻ってはいけない」との文言がある。

裏面は、風景写真が印刷されており、下部にHerz Jesu Kirche（イエスの聖心教会）と記されている。ターレ市内にあるローマカトリック教会である。この種のノートゲルトの裏面には、他にも数種類のターレの風景写

真が印刷されている。裏面の日常の風景写真と、表面の非現実的な画像との落差に驚愕させられる。

④「ユダヤ人への処罰」（図4参照）

発行年：1921年。発行地：Brakel（ブラーケル）。額面：50ペニツヒ。

表面の画像をみると、左半分には檻の中で顔をしかめた男性（ユダヤ人）が嘸し立てる群衆の目前で港に沈められようとしている画像がある。説明書きには「このようなペテンのイタチ野郎たちは以前から中産階級の者の手で沈められていた。今日でも、押し売りや悪徳人や卑劣な者たちには有効であろう」と書かれている。右半分には男性（ユダヤ人）が平らなベンチに縛り付けられ、傍には鞭を振り回している看守が腕まくりをしている画像がある。説明書きには「座るためのものと見えるベンチに、賢い判事は教育的にもっと良い使用法を与えている」と書かれている。

裏面には、ブラーケル近郊の風景（建築物）が描かれている。

⑤「焚書」（図5参照）

発行年：1920年。発行地：Amstetten（アムステッテン）。額面：50ヘラー。

オーストリアの民間政治組織「反ユダヤ同盟」アムステッテン支部が発行したノートゲルトである。表面下部に当該組織の幹部らのサインがみられる。この種のノートゲルトは、10ヘラー、20ヘラー、50ヘラーの三種の額面が発行されている。表面の図柄は三種とも同じだが、裏面の文言はそれぞれ異なっている。図5は20ヘラー紙幣である。

表面の画像は、当時オーストリアで発刊されていたリベラルなユダヤ系新聞の焚書を描いたものである。

裏面は、10ヘラー紙幣にはJosef von Scheffel（ヨーゼフ・フォン・シェッフエル）を引用し「セム族に対するゲルマン民族の蔑視は、血統や人種、伝統（祖先の遺産）、民族性、及び文化に基づくものが大きく、宗教的な違いから来る蔑視は、そこまでではない」と記されている。20ヘラー紙幣にはFranz Liszt（フランツ・リスト）からの引用で「ユダヤ人は孤立放置か国外追放かという問いが、まさしくユダヤ人の死活問題なのだ、ユダヤ人の暮らす全てのキリスト教国家が認識する時が、きっとやって来る」と記されている。50ヘラー紙幣には「過去に自民族を愛し、ユダヤ人に対する迫り来る危機を認識し、そして今かかる危機と戦わなければならない」と考える。あらゆる政治的、宗教的諸団体とゲルマン人は、

われわれの反ユダヤ同盟に参加せよ。アーリアン・プレスを読み、広めよ」との文言がみられる。

3. 水晶の夜と迫害の拡大

「水晶の夜」と呼ばれる、ドイツ全土のユダヤ人に一斉に向けられた攻撃の刃は、この事件の起こる二日前の1938年11月7日に、パリで駐仏ドイツ公使館書記官が17歳のユダヤ人少年に暗殺されたことに端を発する。ヒトラー政権はこれを利用するかたちで、ユダヤ人への報復をドイツ国民に呼びかけた。そして11月9日から10日にかけて、一夜のうちにドイツ全土の267のシナゴーク、7,500の商店、数多くの住宅、ユダヤ人墓地が破壊され、26,000人以上のユダヤ人男性が逮捕され、強制収容所に拘引された。多くのユダヤ人が暴行を受け、相当数が殺害された（Döscher 1988:181）。破壊されたシナゴークや商店のガラスが街路いっばいに散らばり、街灯のもとで冷たくキラキラと輝いていたことからKristallnacht（水晶の夜）と呼ばれる。

ヒトラー政権は、ドイツ国籍を有するユダヤ人全員に贖罪金として総額10億ライヒスマルクの課徴金を科し（Döscher 1988:134）、国外強制移住を行い、ユダヤ人の生存を脅かし始めた。この事件が起点となり、のちに総数600万人に及ぶユダヤ人大虐殺へと、迫害が広がっていくことになる。

雨宮栄一は「この時を境にしてナチスの要人たちがユダヤ人問題の「最終解決」をほのめかすようになったことを考えても、この事件はアウシュヴィッツに至る決定的な一段階でもあった」と指摘する（雨宮 1987、1989 4版：202）。しかしながら、雨宮は更に「水晶の夜」事件に対し、ドイツ告白教会が沈黙していたことを、Karl Barth（カール・バルト）の言葉を引用し「告白教会はこのユダヤ人迫害を、自分たちの信仰を問う政治問題として理解せず、全く目を覆っている」と指摘している（雨宮 1987、1989 4版：204）。続けて雨宮はDietrich Bonhoeffer（ディートリヒ・ボンヘッファー）の言葉を引用し「われわれの教会はここ数年、ただそれが自己目的であるかのように、自己保存のためにのみ戦ってきた。そこで教会のかつての言葉は無力になり、沈黙せざるをえなくなっている」、「われわれが、今日、キリスト者であることは、ただ二つの仕方においてのみ成り立つ。それは、祈ることと、人間の間で正義を行うことである」と続けている（雨宮 1987、1989 4版：206-207）。この言葉は今日の教訓ともなり得るであろう。

4. ドイツ帝国銀行券と反ユダヤ

1933年1月にヒトラー政権が誕生すると、ユダヤ人への憎悪の感情を掻き立てるプロパガンダの一環として、ノートゲルトに使われていた画像を、ライヒスバンクノートに重ね刷りして国民に配るという方法が採られるようになる。重ね刷り紙幣の画像には、ノートゲルトに使われていた画像のほか、ドイツ国内及び他国で出回っていた反ユダヤポスター等の画像をも取り込んだものが幾種類もあるが、ここではその中から数種類を取り上げることにする。

① 「ルターとヒトラー」 (図6参照)

この紙幣は、1923年発行のライヒスバンクノートの裏面に、マルティン・ルターの肖像画を重ね刷りしたものである。裏面には1483と1933の数字が見られる。1483年はルターの生誕年であり、1933年はヒトラー内閣が誕生した年である。肖像画の下部には「ヒトラーの闘争とルターの教え、国民の防衛」の文言がみられる。

このルターの肖像画の原画は、本来、ルター生誕450周年記念のポスターとして作成されたものであるが、ヒトラーをドイツ国民に人気の高いルターと同列に置くことにより、ヒトラーのカリスマ性や正当性を国民にすり込むことを意図して、広く行き渡ることが見込まれる紙幣を用いたと考えられる。また、ルターを担ぎ出したのには、もう一つの明白な理由がある。それは、ルターがとくにその晩年にかなり強いユダヤ人批判を行っていたことから、ヒトラーはルターを自らの主張の後ろ盾としたのである。ルターのユダヤ人批判について、わが国では石井正己(1987)、宮田光雄(2017)(2018)等の研究がある。

ルターは1543年に*Von den Jüden und jren Lügen* (現代ドイツ語では*Von den Juden und ihren Lügen*『ユダヤ人とその虚言について』)を著わした。これは厳しくユダヤ人を攻撃し排斥する内容の文書である。しかしながら、石井は「すでにルターに於るユダヤ人問題が今日の人種問題に関わってはいるけれども、直ちに読みかえてはならないこと、その歴史的な脈絡を検討する必要があること、ルターの攻撃に神学的理由があるとすれば、その意味を問うことが必要である」と指摘する(石井 1987:55)。

ヒトラー政権発足発当時に、ルターとヒトラーとの結びつきを強調した一人に、エアランゲン大学の神学者で著名なルター研究家のHans Preuß(ハンス・プロイス)がいた(Preuß 1933)。宮田はプロイスの主張を批評して、プロイスはルターとヒトラーの類似点として、ともに「ドイツの

指導者」であり、ドイツ「民族を救済するために〔神から〕召し出されている」とし、それら両者の基本的な平行関係から更に派生するいくつかの類似点を論じ、また、プロイスはヒトラーの宗教性について、ヒトラーは深く宗教的な人間であるとし、ナチズムは宗教改革と同じく宗教運動であるとし、ヒトラーを神から遣わされたドイツ民族の救済者として持ち上げた、としている（宮田 2017：39-43）。このようなプロイスの誤った判断と行動がドイツ国民に与えた影響を無視できないであろう。

ナチ党リーダーのなかにはルターに対する拒否や嫌悪はあったが、大衆に訴える政治宣伝という点でルターに役割を与えた。それによって、ナチスの反ユダヤ政策がルターの権威のもとで正統化されることを目論んでいた（宮田 2017：51-52）。

②「キリスト教の敵」（図7参照）

この紙幣は、1923年発行のライヒスバンクノートの裏面に、重ね刷りでキリストの磔刑とユダヤ人が描かれている。その下には、ポーランド語で「キリスト教の致命的な敵」と書かれている。

③「ユダヤの星は敵」（図8参照）

この紙幣は、1923年発行のライヒスバンクノートの裏面に、重ね刷りで「ユダヤの星（六芒星、ダビデの星）」が描かれている。星の中央には「ユダヤ人」と書かれている。1941年9月から、ヒトラー政権によって、ユダヤの星はドイツ在住の6歳以上のすべてのユダヤ人が、外に出る時には一番上に着る服の左袖に着けるように命じられた。ユダヤの星の右側には「このしるしを付けた者は誰でも私たちの敵である」と書かれている。

④「ナチスにおののくユダヤ人」（図9参照）

この紙幣は、1922年発行のライヒスバンクノートの裏面に、重ね刷りで、ナチスの象徴である「かぎ十字」と、そこから放たれる光にユダヤ人がおののいている様が描かれている。足元には「義なる神、再来。新たな到来」「友よ、ヒトラーと国家社会主義に來たれ」と記されている。

⑤「ユダヤ人の処刑」（図10参照）

この紙幣は、1923年発行のライヒスバンクノートの裏面に、重ね刷りで、ナチスの象徴である「かぎ十字」と、二人の男性（ユダヤ人）が処刑になっている様が描かれている。この画像は1921年にTostedt（トシュ

テット)で発行されたノートゲルトに描かれた画像を、ヒトラー政権がユダヤ人排斥のプロパガンダとして利用したものである。処刑の画像の下には「これはすべての詐欺師におこるべきことであり、そうすればドイツはより良い状態になる」と記され、その下には「ナショナリスト(民族主義者)に投票を」と、大衆に呼びかける文言がみられる。

⑥「インフレーションの元凶」(図11参照)

この紙幣には、1923年発行のライヒスバンクノートの裏面に、重ね刷りで、ドイツ国内のハイパーインフレーションの原因はユダヤ人であるとし、「誰がわれわれのお金を切り下げたのか? ユダヤ人である!」との文言がある。

おわりに

以上、ノートゲルトを通して拡散された反ユダヤ思想の実態をみてきた。1920年代初期にいくつかの地方で現れた反ユダヤのノートゲルトは、1933年以降にヒトラー政権の反ユダヤ政策によって、ドイツ全土に広まった。その方法の一つが、ノートゲルトの画像を含め欧州各国で作成された反ユダヤ主義ポスター等の画像を、ライヒスバンクノートに重ね刷りして、なかにはプロパガンダの文言を入れて、大衆に配布するというものであった。

1920年代初期は、反ユダヤのノートゲルトばかりでなく、僅かな種類ではあるがユダヤ人が運営する企業が発行したノートゲルトもある¹⁰⁾。しかしながら紙幣に書かれている内容は、何れも反ユダヤ主義に対する抵抗というものではなく、運営するホテルや店を宣伝する文言である。

ユダヤ民族の歴史をひと言で表すならば、ディアスポラ故の偏見と差別、それに伴う迫害の歴史であったといえよう。その被害の最たるものが、ロシアのボグロムに端を発しホロコーストに至る悲惨な歴史ではなからうか。その最中に現れたノートゲルトは、かかる時代のユダヤ人観そのものを投影していた。別の言い方をすれば、その時代の社会問題の捌け口がユダヤ人に対して強烈に向けられた時代であった。その一つとして、人々が日常生活で使用するノートゲルトに刷り込むという方法が採られたのである。

われわれは、歴史におけるユダヤ人への偏見、差別、迫害を、記憶に留めるだけでなく、今日における重要な課題として認識することが必要である。それはユダヤ人に向けられるだけではなく、さまざまな民族、文化、

特徴を持った人々と、どのように共生社会を築いていくべきかの課題でもある。

付記

本稿で用いている資料には、人権上の問題となるユダヤ人を揶揄し差別する文言や過激な画像が含まれるが、研究上の目的のため敢えて修正することなくそのまま表示していることをお断りしておきたい。本稿で取り上げたような悲惨な過ちを、われわれ人間は二度と繰り返すことが無いように願ってやまない。

註

- 1) 「欧州に根強い反ユダヤ主義、新たな広がりも CNN調査」2018.11.27、Tue posted at 21:34 JST.
- 2) 「ユダヤ人墓地にナチスの「かぎ十字」、80基に被害」AFPBB News、2019/02/20-12:53.
- 3) 「ユダヤ人似の人形燃やす、ポーランドのイースター行事に非難」AFPBB News、2019/04/24 02:47.
- 4) 「反ユダヤ主義的カーニバル、無形文化遺産取り消し」朝日新聞社、朝日新聞デジタル、2019/12/14 09:35.
- 5) Notgeld（ノートゲルト）は、1919年から1923年にかけてドイツで発生したハイパーインフレーションの時期に、ドイツおよび一部占領地域（主にオーストリア）で流通していた地方通貨である。この通貨は、ドイツ帝国銀行（Reichsbank ライヒスバンク）が発行する法定通貨ではなく、地方自治体、市中銀行、国営企業、民間企業等が発行し支払いのために便宜的に使用されたもので、地域のコミュニティの間でのみ通用する公的な通貨に代わる補助通貨であった。
- 6) ロシアの内相ニコライ・イグナチエフのもと、1882年5月3日に「ユダヤ人に関する臨時条例」が裁定された。その内容は、1) 「…ユダヤ人に対し、今後都市・メスチエチコの外に新たに移住することを禁ずる。農業に従事している現存のユダヤ人入植地に関してのみ、例外を許す」。2) 「都市・メスチエチコの外にある不動産に対する、ユダヤ人名義の権利証書・担保証書・借地契約の締結を暫定的に停止する…」。3) 「ユダヤ人に対し日曜日および12のキリスト教祝祭日に商取引を行うことを禁止する…」というものであった（原 1973）。「現行法規の全面改訂まで」とされていたこの「臨時条例」は、その後、永続的なものとなった。
- 7) バビエルマルクは主に紙幣で発行されたが、なかには布製や陶製のもの等がある。ドイツやオーストリアで、地方自治体をはじめ民間企業等が発行し、その種類も多く、地域での準用通貨として用いられた。
- 8) ノートゲルトの発行団体は総計2,251団体にのぼったが、1922年7月17日にドイツ政府は「ノートゲルトの発行並びに兌換に関する法律」に基づき、ノートゲルトの発行を

禁止した。しかしながら、同時に政府の印刷能力の不足から地方自治体や民間企業等が政府の通貨を発行することが許可された（渡辺 1989：340）

- ⁹⁾ ドイツ語での法律名は、Gesetz über die Ausgabe und Einlösung von Notgeld vom 17 Juli 1922.（日本銀行調査局 1946：139）。
- ¹⁰⁾ ユダヤ人が運営する企業が発行したノートゲルトの例としては、Norderney（ネルダーニー）でHeinz Hoffmann（ハインツ・ホフマン）が運営していたHoffmans Hotelが、1922年に額面50ペニツヒの紙幣を発行している。表面の左右に「ユダヤの星（六芒星、ダビデの星）」が配置され、中央にホテルの建物が描かれている。Hoffmannはナチスの迫害から逃れるため1939年にパレスチナに渡り、1949年にはChaim Bartikva（ハイム・バル＝ティクヴァ）とヘブライ名に改名し、そこで95歳で亡くなった。

参考文献

- 兩宮栄一（1987、1989 4版）『ユダヤ人虐殺とドイツの教会』教文館。
- 愛宕北山（1938）「シオン議定書 解説全訳」辻村楠造編『ユダヤ問題論集』101-198、国際政経学会。
- Bertram, Martin H. (1971) On the Jews and Their Lies, 1543, *Luther's Works, Vol. 47, The Christian in Society IV*, Fortress Press.
- Brustein, William I. (2003) *Roots of Hate: Anti-Semitism in Europe before the Holocaust*, Cambridge University Press.
- Cohn, Norman (1967) *Warrant for Genocide: The Myth of the Jewish World-Conspiracy and the Protocols of the Elders of Zion.*, Eyre & Spottiswoode.
- Döscher, Hans-Jürgen (1988) *Reichskristallnacht: Die Novemberpogrome 1938*, Ullstein. (=1990, 小岸昭訳『水晶の夜—ナチ第三帝国におけるユダヤ人迫害』人文書院)。
- Fergusson, Adam (1975, 2015) *When Money Dies: The Nightmare of the Weimar Hyperinflation*, Old Street Publishing. (=2011, 黒輪篤嗣、桐谷知未訳『ハイパーインフレの悪夢』新潮社)。
- Grabowski, Hans, Hehl, Manfred (2003-2004) *Deutsches Notgeld.*, Band 1-Band 8, Gietl Verlag.
- 羽田功（1993）『洗礼か死か—ルター・十字軍・ユダヤ人』林道舎。
- 原暉之（1973）「近代ロシアにおけるユダヤ人およびユダヤ人問題」『愛知県立大学外国語学部紀要』通号8、1-71。
- Hitler, Adolf (1925-1927, 1936 Zwei Bände) *Mein Kampf*, 213/217 Ausgabe, Zwei Bände in einem Band, Zentralverlag der NSDAP, Franz Eher Nachf. (=2018改版40版, 平野一郎、将積茂訳『わが闘争 上・下』角川文庫)。
- 包荒子（1924、1925 4版）『世界革命之裏面』二西社。
- 石井正己（1987）「ルターにおけるユダヤ人問題」日本ルーテル神学大学ルター研究所編『ルター研究 第3巻』聖文舎。
- Kaufmann, Thomas (2011) *Luthers Judenschriften.*, Mohr Siebeck.
- 黒川知文（1981）「1881年のポグロム分析（1）」『一橋研究』6（3）：17-37。
- 黒川知文（1982）「1881年のポグロム分析（2）」『一橋研究』7（1）：51-68。
- 黒川知文（1996）『ロシア社会とユダヤ人—1881年のポグロムを中心に』ヨルダン社。
- Levitats, Isaac (1981) *The Jewish Community in Russia, 1844-1917.*, Posner and Sons.

- Luther, Martin (1948) (First English Translation to be Published in the U. S. A.) *The Jews and Their Lies*, Christian Nationalist Crusade.
- ルター、プラナイティス、歴史修正研究所監訳 (2003) 『ユダヤ人と彼らの嘘・仮面を剥がされたタルムード』 雷韻出版。
- 宮田光雄 (2017) 『近代ドイツ政治思想史研究』 (宮田光雄思想史論集 5) 創文社。
- 宮田光雄 (2018) 『ルターはヒトラーの先駆者だったか—宗教改革論集』 新教出版社。
- 森義信 (2011) 「ノートゲルト学事始め—券面に描かれた絵画にみるドイツ国民の悲哀—」 『社会情報学研究』 (大妻女子大学紀要—社会情報系) 20、63-86。
- 森義信 (2012) 「ハイパーインフレーションとノートゲルト—1920年代初頭のドイツ社会史点描—」 『社会情報学研究』 (大妻女子大学紀要—社会情報系) 21、75-105。
- 中谷昌弘 (1997) 「一八八一年ボグロム後の帝政ロシアのユダヤ人問題に関する一考察—「ユダヤ人に関する臨時条例」を中心に—」 『ロシア研究』 61、2-12。
- 日本銀行調査局 (1946) 『ドイツインフレーションと財政金融政策』 実業之日本社。
- 野村真理 (2016) 「ユダヤ人ネットワークの実情と虚像—「世界イスラエル連合」から『シオン賢者の議定書』へ—」 『東欧史研究』 第38号、1-7。
- Poliakov, Léon (1955-1977) *Histoire de l'antisémitisme*, vol. 1-4, Calmann-Lévy. (=2005-2006, 菅野賢治、合田正人監訳『反ユダヤ主義の歴史』第1巻-第4巻、筑摩書房)。なお、邦訳では原著のvol.4以降の1945年から1993年までの歴史について、Poliakov監修のもと彼を含め12名の執筆者によって記された共著を第5巻として組み入れている (2007)。
- Preuß, Hans (1933) *Luther und Hitler: als Beigabe, Luther und die Frauen*, Freimund.
- Segel, Benjamin W. (1995) (Levy, Richard S., Translator and Editor) *A Lie and A Libel*, University of Nebraska Press.
- 四王天延孝 (1941) 『猶太思想及運動』 内外書房。
- Tödt, Heinz Eduart (1997) *Komplizen, Opfer und Gegner des Hitlerregimes*, Chr. Kaiser. (=2004, 宮田光雄、佐藤司郎、山崎和明訳『ヒトラー政権の共犯者、犠牲者、反対者』 創文社)。
- 渡辺武 (1989) 『ドイツ大インフレーション—その政治と経済—』 大月書店。
- Wing, Jeffrey J. (2017) *Paper Money Messages: A Pictorial Perspective – Volume 1 (Global)*, Createspace Independent Publishing Platform.
- Wing, Jeffrey J. (2018) *Paper Money Messages: A Pictorial Perspective – Volume 2 (Notgeld)*, Createspace Independent Publishing Platform.
- Zipperstein, Steven J. (1986) *The Jews of Odessa: A Cultural History, 1794-1881*, Stanford University Press.

資料

図1. 「シオンの長老」

表面



裏面



図2. 「絞首刑のユダヤ人」

表面



裏面



図3. 「悪魔と密談するユダヤ人」

表面



裏面



図4.「ユダヤ人への処罰」

表面



裏面



図5.「焚書」

表面



裏面



図6. 「ルターとヒトラー」

表面



裏面



図7. 「キリスト教の敵」

表面



裏面



図8. 「ユダヤの星は敵」

表面



裏面



図9. 「ナチスにおののくユダヤ人」

表面

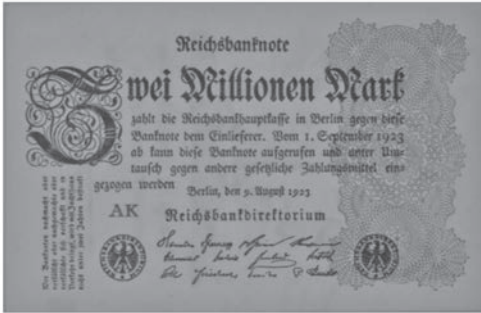


裏面



図10. 「ユダヤ人の処刑」

表面

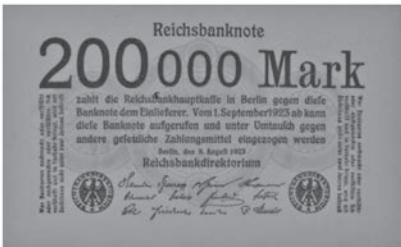


裏面



図11. 「インフレーションの元凶」

表面



裏面

